

平成18年3月19日・香陵ライオンズ30周年記念

兵学校の先駆性改めて・香陵LC30周年記念で鼎談

講演会では、鼎談(ていだん)「沼津と西周」が行われ、元国士舘大教授で沼津史談会の四方一瀨会長、元島根県立津和野高校長で津和野町文化財保護審議会の松島弘会長、元明治史料館学芸員で国立歴史民俗博物館・総合研究大学院の樋口雄彦助教授が講師を務めた。

松島会長は、西が哲学者、心理学者、美学者、言語学者、法学者などと多様な学問に精通し、沼津兵学校頭取のほかにも、東京学士院の会長を務めるなど幅広く活躍していたことを説明し、「あらゆる面で近代日本の代表者だった」と話した。

続けて西の経歴を紹介。西は十二歳で藩校の養老館に学び、二十歳で同館の教師に任命され、大坂や岡山に遊学して学問に励み、二十五歳の時に江戸に上ったが、その時に触れた洋学に目を開かれ脱藩。幕府からオランダ留学を命ぜられた。オランダでの二年半で法律学や経済学、科学的研究法である帰納法、カントの哲学などを学んでいる。

松島会長は、「黒船の軍事技術を学ぼうとしたのではなく、黒船を造ることができた基盤にある学問に目を向けた」と説明した。

四方会長は、西が生まれ育った津和野藩は神道を中心とした国学による政策を行っていたが、西洋の学問も取り入れていたことから「これが後の西周を支えた大きな要素だったと思う」との見方を示した。

樋口助教授は西について、沼津兵学校の設立に至る経過から説明。「静岡藩、徳川家が作った陸軍の士官学校で、実質存続したのは三年半に過ぎない。慶応四年一月の鳥羽伏見の戦の後、徳川家が七十万石をもらって五月に静岡に移る。数万人の旗本、御家人が静岡県に移り住み、沼津は静岡に次ぐ拠点だった。水野藩など県内にあった藩は(ほかの城に)出て行くことになった」と解説。

十分の一程に減った石高で徳川家は旗本、御家人に限っても家臣全てを養うことはできず、現代でいうリストラと同様の措置を取ったが、それでもまだ減らす必要があったほど。結局、現在の静岡市、沼津市と周辺地域に幕臣が集中して移住したという。その上で、「この幕臣の子どもを教育する施設として兵学校が作られた。七十万石にふさわしい軍備を備えなければならないという責任があった。だから兵学校は作られなければならなかったし、その学生の中から立派な士官を養成することが必要だった」とした。

一方で、「西は学者だったので、幕末までは軍事にはほとんど関係がなかった。西が兵学校の学長(頭取)になったのは、西も驚いたと思うが、オランダに留学した経験から新しい発想の学校を作らなければいけないという思いがあったと思う」と説明。

四方会長は、「この地区には、藩校とか寺子屋などがあったが、兵学校はそれらとは違って」として、江戸時代の寺子屋や藩校は、小学校、中学校、高校どのような年齢による就学順序がなく、一つ一つが別々に存在していたことから、附属小学校を持つ兵学校が特別な存在であったことを指摘。また、「一般の人にも門戸を開いたというのは、民主的な学校の先駆けだった」とし、「兵学校という名前はあがるが、非常に多くの分野に人材が輩出し、兵学校(という名)にはふさわしくないような人材を出した。これは西周の幅広い知識によるものではなかったか。当時の日本では『最高の勉強をするなら沼津へ行け』と言われていたほどだ。こんな優秀な学校がわずか三年でつぶれてしまった」と残念がった。

樋口助教授は、「西は学者であり、賢い人だったので自分自身でも分かっていたと思うが、全国二百カ所に分かれていた藩体制が、いつまでも続く訳はないと考えていた。藩体制を

なくさなければいけないという廃藩置県のうわさは(当時)あちこちで出ていた」とし、続けて、「西は(廃藩置県が行われる一年前の)明治三年七月に明治政府に、静岡藩にとって兵学校は大きすぎるので政府に引き取ってもらいたいという願い書を出していた。これからの時代、一つの藩の士官を養成しているだけではだめで、日本の士官を養成しなければならないという考えだった」と説明。

また、「明治三年というのは、実は兵学校が一番隆盛していた時で、この真っ只中に兵学校を静岡藩から切り離すことを考えていた。九月には兵学校の校長(頭取)を辞任して新政府に仕えることになった」と述べた。

在任期間は明治元年十月から三年九月までと短かったが、樋口助教授によれば西は兵学校に大きな構想を抱いていた。元年十二月、西は徳川兵学校掟書によって、陸軍の士官を養成するための授業内容を定めたが、その後、追加掟書を記し、軍人の養成コースとは全く異なる文学部、工学部、理学部などを設置する予定でいた。このことについて樋口助教授は、「計画倒れで終わってしまったが、実現したら欧米型の総合大学になる可能性があった。彼にとっては軍人の養成は本分ではなく、本当の高等教育を日本でやりたかったのだと思う。幻に終わった総合大学化構想は、西周という人が、いかに先進的なことをやろうとしたかが分かる事実で、沼津に日本で最初の総合大学ができた可能性があることを、沼津の人は誇りに思っていると思う」と語った。(沼朝3月29日号)